

トリオについて

端山貢明

偶然か、ルーセル、フォーレ、ラヴェルの三人はピアノトリオをそれぞれ一曲づつ書いて居る。

弦楽四重奏やピアノを伴った二重奏が作曲家にとって非常に永い間みのり豊かな分野であったのに較べて、五重奏七重奏八重奏と云った合奏の形態はある時期以後、急速にその姿を消してしまったのだが、ピアノトリオはこの間にあってやや特殊なあり方をして居るように思う。

確にベートーヴェン以後ピアノ・トリオを何曲も書いた作曲家は段々に減って来て居るのだが、又逆に一曲も書かなかった人と云うのも少い。この非常に表現力の豊かな三つの独奏楽器の合奏はすべての作曲家にとってやはり大変魅力的なものだったのだ。しかしこの各楽器の性能をそれぞれ最高度に生かして、がっちり組合った曲を書く段になるとそこには色々な困難がある。

それは主に音楽の華やかな部分を常に受持って居る二つの非常に似た性格の弦楽器を並べた事と、その両方の音域のすべてをピアノがカバーして居ると云う或る種の三角関係をなして居ることによるのだが、この三角関係と云うものはいつでも面倒なもので、ソナタ形式の曲を書く場合にも、三つの楽器のうちどれか一つは、独奏楽器として主題の主要部分を弾くことが出来なくなってしまうのだ。

ピアノトリオは三人の名人があつまればすぐに名演奏が可能だと云うが、その三人の名人芸をそれぞれ充分に発揮させる満足すべき作品となると実に全く意外な程少い。

作曲家達はこの欠点を救うべく、色々な工夫をして居る。中には割に便宜的な方法で問題点をさけて居る物も少くないが、これ等の種々の工夫がこのジャンルに典型的なピアノトリオと云う物を考える事が出来ない程多様な形を与える事になった。

今夜の三つの曲に於てもそれは明瞭なのだが、そこに個性の美はもちろんのことだが、方法による外観の差と云うものも非常に顕著にあらわれて居るのを聴き逃されることはないだろう。

フォーレのトリオは作品番号を見ても解る通り非常に晩年に書かれた。と云うより一九二四年に亡くなる前の年、七十八才の時に書いたものだ。一九二三年と云えば音楽はすでに現代に向って相当に大きく進み始めて居た。ストラヴィンスキーもシェーンベルグもヴァレーズもその重要な作品を悪評の中で着々と発表して世間をさわがせて居た時代である。その時代にフォーレは外部の騒ぎも知らぬ顔でこの曲を書いて居た訳だ。月並な言い方かも知れないが、フォーレはやはり歌に於て最も作曲家であったのだと思う。声楽とピアノの曲を除いた後の作品にヴァイオリンやセロを主体とした合奏曲が圧倒的に多いのもそれと無関係ではないだろう。このトリオもピアノトリオと云う形の長い歌なのだ。それは一つの白鳥の歌でもあ

る。私達がこの曲を聴くのはその歴史的な価値の為なのではない。

ただこの音楽が鳴って居る間、私達はその物静かな空間の中にじっと身をひたして居ればよいのだと思う。フォーレはしかしこの終楽章において、器楽合奏の鮮烈な魅力を音楽に与えるのを忘れなかった。

ルーセルは大変に晩学だった。それまで船乗りになるつもりで居たのだが二十九才になってようやくグンディのクラスにはいった。

だから三十二になって発表したグンディの影響の見られるこのトリオが作品2であるのにしては、いかにも成熟した思想から生れたように見えるのは無理もない事だ。ルーセルと云えばむしろ蜘蛛の饗宴やバックスとアリアーヌのような舞台作品の作家として知られて居るが、このトリオでは視覚的な意味づけをされた音の流れの指向と同時に、一聯の古典的な様式による作品を経て交響曲に至る「整い」に対する好みはむしろ非常に強く現われて居る。そしてこの作品は、親しみやすくよく響くけれどもややしまりのない後年の交響曲などに較べてはるかに純粋に、しっかりとめん密に書かれた立派な曲である。

ラヴェルのトリオに於てはピアノが、圧倒的な優位を占めて居る。それはあたかも、ピアノ協奏曲のような発想で書かれピアノのパートは、他の二部に較べて非常に強く厚く書きこまれて居る。

フォーレの場合もルーセルの場合もそれ等は室内楽であり、書かれた音を書かれたように演奏すれば、大体書かれたような音楽になる最低の保証があるのだが、ラヴェルの場合音楽のキャパシティははるかに大きく、これだけの質量を持った音楽を充分に鳴り響かせるのは、とても生やさしいものではないのだ。

この曲では殊に演奏の質感が鳴らされた音楽の価値に決定的に影響する。

例えば一楽章冒頭のテーマを奏するピアノには最高の音感が要求され、それが後に続くあらゆる部分の質を約束することになるのだ。

あの和音のテーマを響きの快い音楽風に軽々しく弾かれては、このトリオの価値は半減してしまう。

常に高度な技巧の整いを見せるラヴェルの作品中にこのトリオも含めて、左手の協奏曲やヴァイオリンとセロの二重奏曲のようにその技巧の上に精神の内がわを露呈してしまっているようなものが幾つかある。

この曲は一九一四年に起った第一世界大戦への応召を決意したラヴェルが、珍しく非常に短期間で書き上げたもので、特異な状況下における集中した精神状態が、この曲に本質的な場所で強い力を与える事になったものと思われる。しかしこのことが、仮に全く無関係だったとしても、この曲は実にもの凄い曲である。